

〈論 文〉

## 貨幣の起源と物々交換（2）

——ロー，マルクス，メンガー——

古 川 顕\*

### V メンガーの貨幣起源論

#### 1 貨幣の起源と販売可能性

マルクス『資本論』第1巻の初版出版の4年後（1871年），カール・メンガーは主著『国民経済学原理』の初版を公刊する。この書物（とくに第2章価値理論，第4章交換理論，第5章価格理論）において，メンガーはジェヴォンズの『経済学の理論』やワルラスの『純粹経済学要論』とともに，周知の限界効用理論を提起する。もっとも，同じ限界効用理論とは言っても，彼の理論はジェヴォンズやワルラスの理論とは方法論や倫理的内容などにおいて大きく異なり，むしろ両者は敵対的ですらある<sup>1)</sup>。メンガーは『国民経済学原理』第8章の「貨幣の理論」において，以下に詳述する「販売可能性」（Absatzfähigkeit : saleableness）という概念を駆使して貨幣の起源に関する理論を展開する。

メンガーは，有名な貨幣の起源に関する論文の冒頭で次のように述べている。「古くから，そして異常なほどに，社会哲学者や実証的な経済学者の注意を引きつけた現象がある。その現象とは，ある種の商品（これらは，進歩した文明諸国で鑄造された金や銀の金属片と，その後のそうした鑄貨を象徴する〔紙券貨幣という〕証書）が，一般的に受容される交換手段になるという事実である。ごく普通の知性にとってさえ，ある商品が他のもっと有用なものと交換にその所有者によって断念されるのは明白である。けれども，一国のどんな経済主体も，彼の財を明らかに有用でない小さな金属片やそれを象徴する証書と進んで交換するのは，普通の物事の道筋とはまったく正反対の行為である。サヴィニー（Savigny）のような傑出した思想家でさえ，それがまったく“不可解である”と知るのは何ら不思議なことではない」（Menger [1892] p. 239<sup>2)</sup>）。

メンガーによれば，古くから金属片や紙券，とくに金や銀などの貴金属が貨幣として流通するようになったのは，一般的な慣行や法制度によるのであり，鑄貨の形状やそれに捺された刻印は，国家の法令の象徴であるとみなされてきた。「事実，それがアリストテレスおよびローマの法学者，中世の著述家によって密接に引き継がれてきた見解である。貨幣の理論におけるより近代的な発展でさえ，実質的にこの立場を越えてはいない」（*Ibid.*, p. 241）というのである。

メンガーは，貨幣を法律によって制度化することは不可能ではないけれども，貨幣の起源となる唯一の，あるいは主要な方式ではないし，また貨幣生成の過程を自然発生的なものとか，貨幣を原始時代ないし太古に生まれたものというだけでは不完全であり，「貨幣の起源は，われわれが論じている社会的慣行の確立について，社会の一員の個々の努力がもたらす偶発的な結果であり，彼ら

---

\* 京都大学名誉教授

が商品の販売可能度の差異 (the different degree of saleableness in commodities) を区別する方向に一歩一歩前進したとみなすようになってはじめて十分理解するに至る」(Menger [1892] p. 250, 傍点は引用者) というのである。また、「貨幣は法律によって生み出されたものではない。その起源は社会的なものであって、国家の制度ではない。国家の権威による承認は、貨幣とは相いれない考えである」(Ibid., p. 255) とも述べるように、メンガーの見解はクナップの貨幣国定説とは正反対である<sup>3)</sup>。彼自身は法律や国家の権威を最重視するクナップの貨幣国定説 (ないし法制説) を全否定するわけではないが、法律や国家の権威といったものは、「貴金属をはじめ貨幣としたのではなく、貨幣の機能を完全なものとしたにすぎない」(Ibid., p. 255) と主張するのである。貨幣の起源についてのメンガーの結論をあらかじめ要約すると、貨幣は人々の合意であれ、立法的行為であれ、そうした人為的な産物では決してなく、みずからの利益を求める人々の自由な競争の結

- 1) エミール・ガウダー (Emile Kauder) はオーストリア学派の研究者として知られ、一橋大学附属図書館の「メンガー文庫」(現在は同大学社会科学センター) に保管されている『国民経済学原理』などに書き込まれた膨大なメンガー自筆のメモの解説に尽力した人物として有名である。そのガウダーが『限界効用理論の歴史』(1965) において、ワルラス、ジェヴォンズとメンガーとの対照的な見解の相違を表に示している (Kauder [1965] 邦訳 98 ページ)。興味深いので以下に記しておこう。

ワルラス, ジェヴォンズ	メンガー
①科学は实用主義的性格をもっている。幸福を増進させることが科学の目的である。	①科学は価値それ自体である。それは道徳的ないし政治的目標に制約されない。
②快樂への探求は道徳的目標と矛盾する。	②道徳的価値と功利的な価値との間に矛盾が生じるが、この問題の解決は与えられない。メンガーの考えは結論に到達しえない。
③数学は経済問題を解決するために特に大切である。なぜなら、それは相互依存の諸要因の関係を叙述するからである。	③経済理論は経済現象の相互からである関係を研究するのではなくて、むしろ価値、地代、利潤、分業、複本位制等の本質を研究する。
④交換法則は数学的方程式で表されうる。	④方程式は、ただ独断的な説明へと導きうるにすぎないのであって、精密な法則へと導きえない。均衡の叙述は、ただ分析の終わりであって、初めではない。理論家は均衡を叙述する前に、原因、結果の連鎖をまず追跡しなければならない。発生論的な因果方法は機能主義より重要である。

以上の対極的な見解の相違については、表のすぐあとにカウダーの説明がある。これらの方法論上の、あるいは哲学的な見解のどちらが正しいかを判断することは不可能であり、個々人の判断にゆだねざるをえないように思われる。ただし、「メンガーは経済問題の数学的取扱いに悩まされ、……方程式や曲線は経済理論上いかなる位置をも占めなかったということが、彼の弟子たちとともに抱いていたメンガーの確信であった」(Kauder [1965] 邦訳 97 ページ) というのは、確かであったようである。

- 2) サヴィニー (Savigny) については、Schumpeter [1954] (邦訳 (中) 87-88 ページ)、およびメンガー [1883] (邦訳第4編第2章 186-190 ページ) を参照されたい。彼は、経済学における旧歴史学派の始祖 (法学における歴史学派の代表者) とされる W.G.F. ロッシャー (Roscher) に大きな影響を与えたとされる。
- 3) クナップの貨幣国定説については、Knapp [1905] および Knapp [1924] を参照のこと。

果として生成したというものである。

この点でまず紹介したいのは、フランス人研究者のカンパニョロの次のような見解である。彼は、財の交換というのは、交換する当事者同士だけでなく、時間的に交換前と交換後においても平等でなければならないという。「取引において偶発的に起こりうる不正行為の場合を除くならば、交換の前と後において正義の形相として財が平等であるという考えに、メンガーは強く反対する。交換の前と後で「同じ物」を持つという考えを彼が拒否するのは、その考えが矛盾を含むからである。もし同じならば、そもそも交換が行われまいであろう。交換の実施を誘発するのは、主体がおかれた諸条件のもとで、自分の状況を考慮する際に、この交換を実施し、自分が豊富に持っているため価値がより少ないものを放棄するかわりに、自分に欠けていて自分が手に入れたと思うものを入手することで、自分は得をするのだという主観的確信なのである」(Campagnolo [2002], 邦訳 34-35 ページ, 傍点は引用者)<sup>4)</sup>。この引用は、交換が実施されるための前提条件と、その交換に参加することによって何らかの経済的利益が得られるという交換当事者の「主観的確信」こそが、交換が実施されるための不可欠のインセンティブであることをよく示している。

メンガーは、Menger [1871] 第 8 章（貨幣の理論）、およびそれを体系化・精緻化させて文字通り「貨幣の起源」に焦点を当てた Menger [1892] において、貨幣の起源に関するまことに独創的な議論を展開する。彼は前者において、「貨幣は、場所と時間によって異なるその特殊な現象形態においても、合意あるいは立法的強制の結果でもなければ、単なる偶然の結果でもなく、かえって同一時代においては異なる諸国民の、また異なった時代においては同一国民の、異なる経済状態の自然的な所産として現れる」(Menger [1871] 邦訳 238 ページ, 傍点は引用者) と述べ、貨幣は、時と所を越えた「自然的な所産」であることを強調する。ここでの「自然的な所産」とは物々交換のことであり、こうした見解は第 2 節で説明したジョン・ローのそれと基本的には変わらない。た

---

4) カンパニョロは、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』(上) 第 5 巻第 4 章の、「姦淫を犯した者が良き人であるにしても悪しき人であるにしても、それはまったく関係がない。かえって、法の顧慮するところはただその害悪の差等のみであり、どちらが不正を与えどどちらが与えられたということが問題なのであって、法は彼らをいずれも均等な人々として取り扱う」(邦訳 236 ページ) という記述を引用して次のようにいう。[この推論において、このような道徳的中立性が意味をもつならば、需要される財は個人の選択と世の中の状態（および彼に可能な選択肢を示し、要するに主体を世の中に結びつける当該個人の知識）にしか依拠しない。各人は、こうして彼に固有の財の階梯を認識する。そうして、この財の階梯という思想が見られるのは、またしてもアリストテレスにおいてなのである。メンガーはそれを、三角形の図式で、一つの財を飽満に消費するとより上位の財に移行するものとして表わしている。交換を行う相手方との 2 つの階梯を示し合うことにより、今度は「価値」の測定が可能になり、それによって交換が実行に移されるのである」(Campagnolo [2002] 邦訳 34 ページ)。これに続いてカンパニョロは次のように指摘する。「取引において偶発的に起こりうる不正行為を除いては、交換の前と後において、正義の形相として財が平等であるという考えに、メンガーは強く反対する。交換の前と後で「同じ物」を持つという考えを彼が拒否するのは、その考えが矛盾を含むからである。もし同じならば、そもそも交換が行われまいであろう。交換の実施を誘発するのは、主体が置かれた諸条件のもとで、自分の状況を考慮する際に、この交換を実施し、自分が豊富に持っているため価値がより少ないものを放棄するかわりに、自分に欠けていて自分が手に入れたと思うものを入手することで、自分は得をするのだという主観的確信なのである」(同 34-35 ページ, 傍点は引用者)。

なお、以上の引用の中で「三角形の図式」とは、一種の「効用曲線」、あるいは「効用の度盛表」を意味する。これについては、八木 [1990] 108-113 ページを参照のこと。

だしメンガーの物々交換論は、ローよりは具体的で、アダム・スミス流の「見えざる手」による個々の経済主体の利己心に基づく自由競争を重視し、貨幣の生成という歴史的なプロセスをそうした競争による自然発生的な結果とみなすのである<sup>5)</sup>。

メンガーは『国民経済学原理』第8章の冒頭で、「人類が交易をはじめた頃には、経済主体は存在する交換機会の利用から得られる経済的利益をようやく認識しはじめたばかりで、彼らの目的はあらゆる原始文化の単純さに対応して、まずは最も手近にあるものに向けられ、誰もみな交換によって獲得される財の使用価値だけに着目するだろう」(Ibid., 邦訳 219 ページ)と述べ、「実際に行われる交換取引は、それを保有する経済主体にとって、他の経済主体が保有する他の財よりも使用価値は小さいものの、他の経済主体は同じ財に関してこれと正反対の評価をするというような状況に限られるのは、当然のことであろう」(Ibid.)と続けている。さらに、「Aは漁をする網を1張り持ち、これをある数量の麻と交換したがつている。この交換が実際に成立するためには、Aの望みに適う数量の麻を魚網と交換しようとするいま1人のBの存在が必要であるだけでなく、さらに2人が願望をもって出会うという前提が必要である」(Ibid., 邦訳 220 ページ)と、財の交換が行われるための前提条件を明らかにする。これはいうまでもなく、物々交換が成立するための「欲求の二重の一致」という厳しい条件である。

メンガーは、この「欲求の二重の一致」という条件に関して次のようにいう。「特別な協定や国家的強制を必要とせずに、しかもすべての場所の経済主体を抵抗できない力でこの困難が完全に片づけられたと思われる状態に導く1つの救済手段が、事物の本性のなかに存在したのでなければ、上記の困難はまったく克服し難いものとなり、したがって分業の進歩、特に不確実な販売のために財を生産することには大きな障害が生じたことであろう」(Ibid. 傍点は引用者)。このメンガーのいう救済手段とは、彼が多用する「商品の販売可能度」(the degree of saleableness of commodities)あるいは市場性(marketability)という概念に密接に関連する。このメンガーの貨幣理論の核的な概念について少し詳しく検討してみよう。

「商品の販売可能度」という概念について、メンガーは次のように指摘する。「貨幣は個々の経済主体の合意の産物でもなく、立法的行為の産物でもない。誰も貨幣を発明しなかった。自分の経済的利益に対する理解が高まるにつれて、国民中の経済主体のそれぞれが、同時にまた至る所で、販売力がより小さい商品を販売力がより大きな商品と引き換えに入手することで彼らの特殊な経済的目的をかなり促進することができるという明白な認識に到達し、それによって貨幣は国民経済の進展にともなって、多数の相互に無関係な文化的中心地で発生したのである」(Ibid., 邦訳 229 ページ, 傍点は引用者)。「誰も貨幣を発明しなかった」というのは、以下に考察する貨幣の生成に関するメンガーの考え方を知る限り、言い得て妙である。

5) スミスはあまりにも有名な分業論の中で、次のように述べている。「人間は、仲間の助けをほとんどいつも必要としている。だが、その助けを仲間の博愛心にのみ期待してみても無駄である。むしろそれよりも、もし彼が、自分に有利となるように仲間の自愛心を刺激することができ、そして彼が仲間に求めていることを仲間が彼のためにすることが、仲間自身の利益になるのだということを、仲間に示すことができるなら、そのほうがずっと目的を達しやすい」(Smith [1789] 邦訳 25-26 ページ)。この記述は、仲間同士の助け合いにおける博愛心ですら、人間の利己心に支えられているほうが役に立つことを雄弁に示している。この点でも、個々の経済主体の利己心に基づく自由競争を重視したメンガーとは似通っている。意識するか否かは別にして、メンガーはスミスの影響を強く受けているように筆者には思われる。

メンガーはまた、貨幣の起源について次のようにいう。「貨幣が人間経済の自然発生的な産物として出現するというまさにそのことのために、その特別な現象形態も、またあらゆる場所、あらゆる時において特殊で変化にさらされた経済状態の所産であった。そのため、同一国民においても異なる時代ごとに、また同一時代においても異なる国民ごとに、異なった財が……交易のなかでの特  
有な地位（貨幣）を占めることになったのである」（*Ibid.*, 邦訳同ページ、傍点は引用者）。ローヤマルクス同様、メンガーも貨幣は自然発生的に生じたと主張する。

ところで、「商品の販売可能度」という概念とともに、メンガーは「商品の販売可能度の差異」（*different degree of saleableness of commodities*）（Menger [1892], p. 242）という概念をしばしば用いている。この「商品の販売可能度の差異」という概念は、貨幣理論にとって最も重要なものであり、この概念を導入しないのは、「われわれにおける〔経済〕科学の悲しむべき冒瀆であるばかりか、貨幣理論の遅れた状態の本質的原因となっている。貨幣理論は必然的に財の販売可能度を前提とする」（*Ibid.*, pp. 242-243、傍点は原文ではイタリック）とまで言い切るのである。こうした「財の販売可能度」あるいは「商品間に存在する販売可能度の差異」という概念は、まさにメンガーの貨幣理論における「アルキメデスの点」、つまり彼の貨幣理論体系の要（支点）となるアイデアであり、その貨幣起源論にとっては不可欠の概念となっている。メンガーは、「市場で交換取引を行う経済主体は、自己の保有する財をより販売可能度の大きい財と次々と交換する間接交換という迂回方法によって、直接交換に限定するよりも確実に最終的に自己の必要とする財を入手することができるのである」（*Ibid.*, p. 248）と述べ、「商品の販売可能度の差異」という概念が貨幣生成の理論化のために不可欠であると強調する。「商品の販売可能度の差異」に応じて人々が試行錯誤的に間接交換を繰り返し、最終的にみずからの必要とする財を獲得するに至るというプロセスには、まさにメンガーの貨幣理論におけるダイナミズムが集約的に表現されている<sup>6)</sup>。

上述のように、販売可能度の大きい財と小さい財の交換は、それぞれの財を保有する経済主体に

---

6) メンガーに始まるオーストリア学派を代表する一人として、ミーゼス（Ludwig von Mises）もよく知られている。ミーゼスは商品の「販売可能性」あるいは「市場性」を重視するメンガーの見解を引き継いでいる。彼は次のようにいう。「その時々にも最も販路性のある財が一般的に使用される交換手段、すなわち他の種類の商品を市場にもたらす者がまずそれを手に入れることを利益とする財となる。交換市場における相対的に最も市場性のある商品が一般的に使用される交換手段になるという事情は、さらにこの商品と他のいっさいの商品との間の高められた差異をもたらし、それはまたそれで再び交換手段としての前者の地位を固め広げたのである。このように取引の必要から、一連の商品が次第に一般に使用される交換手段となった」（Mises [1953] p. 32）。そして、「交換手段として使用される一群の財のうち、より市場性の小さい財が次第に除去され、ついに最後には、一般に交換手段として使用される唯一の財、すなわち貨幣が残るという不可避的な傾向が生じるのである」（*Ibid.*, pp. 32-33）と結論づけている。

ミーゼスがオーストリア学派を代表する最後の人物であるとするれば、それに先立つフリードリッヒ・ヴィーザー（Friedrich von Wieser）やベーム・バベルク（Eugen von Böhm-Bawerk）がオーストリア学派の発展に寄与したことはよく知られている。いずれもメンガーの大きな影響を受けている。ヴィーザーの貨幣の起源についての見解も基本的にはメンガーを踏襲している。そのことは、彼の「貨幣の価値と歴史の変動」というタイトルの論文（Wieser [1904]）の冒頭部分において、「メンガーの貨幣の起源および本質についての模範的な叙述から出発して、私は貨幣の価値およびその歴史の変動について述べよう」（Wieser, F. [1904] 邦訳 38 ページ）からも明らかである。なお、このヴィーザーの貨幣の起源に関する見解は、「訳者序説」（31-33 ページ）に分かりやすく要約されているのでこれを参照されたい。

とって利益があるからこそ実行される。メンガーは次のようにいう。「相対的に最も販売可能度のある商品が“貨幣”となるときに、そのこと自体がまず第1に販売可能度を実質的に増大させる効果をもつことになる」(Ibid., p. 250)。また「こうして貨幣となる相対的に販売可能度の最も高い財の生み出す効果とは、そのような財の販売可能度と他のすべての財との販売可能度の差異の増大である」(Ibid., p. 252) というように、メンガーにあっては財の販売可能度はその財の一般受容性を決定する最も基本的な要因なのである。

先にも触れたように、メンガーは「貨幣は法律によって生み出されたものではない。その起源には社会的なものがあり、国家の制度ではない。国家の権威による承認は、貨幣とは相いれない考えである」(Ibid., p. 255) との主張を繰り返し表明する。そして、金や銀などの貴金属が貨幣となった点について次のように説明する。「ある一国が歴史に出現するに先立って、かつその後の進んだ経済的文明のあらゆる諸国民のなかで、金属貨幣が一般に受け入れられる交換手段となった理由は、貴金属の販売可能度が他のあらゆる商品のそれよりもはるかに優れているからであり、そして同時に、それらが付随的で補助的な貨幣の機能にとりわけ適格であるとみられるからである」(Ibid., p. 252, 傍点は原文ではイタリック)。

もっとも、メンガーは法律や国家の権威といったものを全面的に否定するわけではない。「あらゆる等級の価値を含むように鑄貨を固定化し、公衆の信頼を得るように鑄貨の確立と維持を図り、可能な限り、その真贋や重量および純度に関するリスクを回避し、とりわけその全般的な流通を保証することは、どこでも国家・行政の重要な機能として認識されてきた」(Ibid., p. 255) との指摘からも、そのことは明らかであろう。しかし法律や国家の役割というのは、「貴金属を初めて貨幣としたのではなく、貨幣の機能を完全なものとしたにすぎない」(Ibid.) と断じているように、メンガーにとってそれらは貨幣生成のプロセスにおける補完的な役割しか果たしていないのである。

メンガーは、ある財が貨幣となるプロセスを考察すると、「慣習」がいかに大きな意義を有するかは明らかであるとして次のように指摘する。「比較的販売力の小さな商品を比較的販売力の大きな商品と交換することは、個々のどの経済主体にとっても利益であるが、このような交換取引が実際に行われるには、自分自身にとってはおそらくまったく無用な財でも、その大きな市場性のために、これを自分の商品と交換に入手しようとする経済主体があらかじめこのような利益を認識していなければならない」(Menger [1871] 邦訳 223 ページ)。「この認識は、国民の全成員によって同時に生じるものではない。むしろ最初はただ少数の経済主体だけが、自分の商品を直接に使用財と交換できないときや、できるとしてもそれがきわめて不確実であるときはいつでも、これらの比較的販売力の大きな他の商品と交換することが利益になることを認識する。この利益は、ある商品が貨幣として一般的に承認されているかどうかとはまったく無関係である。なぜなら、こうした交換はいついかなる事情のもとにおいても、個々の経済主体を必要な消費財の獲得という最終目的に著しく接近させるからである」(Ibid., 邦訳 223-224 ページ)。

こうしたメンガーの主張は、彼の没後、カール・メンガー・ジュニアによって編集・出版された『国民経済学原理』の改訂版においても、繰り返し強調される。その改定版でメンガーは次のように述べている。「物々交換に伴うこれらの困難は財の交易および職業上の分業、またとりわけ不確実な販売に向けた財の生産を進展させることへの障害になっている。この障害は、もしすでに事物そのものの本性の中にそのような障害を除去する補助手段の萌芽が、すなわち諸財の市場性(Marktgängigkeit : marketability) の差異(販売可能性および通用性の良さ)がなかったとしたな

らば、大部分はまさしく克服不可能な障害であったことであろう」（Menger [1923], 邦訳 387-388 ページ）。逆に言えば、社会の成員が「商品の販売可能度の差異」（あるいは市場性の差異）を認識しているからこそ、物々交換を通じて何らかの経済的利益を得ることが可能となるのであり、その利益の追求が物々交換の障害を除去することになるというのである。

メンガーは、こうした認識を踏まえてさらに次のように続ける。少し長いが引用しておこう。「このような事情のもとでは、自分がとくに必要とする財と交換する目的で、財を市場に持ち出すすべての個人にとって、もし自分の財の市場性が貧弱なため本来の目的を直接に達成できない場合、彼の念頭にうかぶ考えは、自分の財を彼自身直接には必要としていないにせよ、さしあたり彼の売りに出す商品を求めている人々から入手できるような財と交換すること、さらに言えば、ともかく自分の商品よりも市場性のかなり高い商品と交換することである。もちろん彼はこれによって、彼の意図していた交換取引の最終目的、つまり彼に特別に必要な財の獲得を今すぐ直接に達成するのではない。それでも彼は、この目的に近づくのである。彼は媒介交換という回り道をして、市場性のあまりない自分の商品を市場性により富んだ商品と交換することによって、直接的な交換による獲得に自己を限定するよりも確実に、しかもより経済的に自己の最終目的を達成する見込みを得る」（*Ibid.*, 邦訳 388-389 ページ、傍点は引用者）。「媒介交換という回り道」、すなわち、迂回的・試行錯誤的な交換取引によって、はじめに意図した真に必要な財を獲得するという最終目的を達成することができるとメンガーは主張する。そしてそのためには、市場性に富んだ（販売可能性の高い）商品を発見することが大事であり、それが結局は貨幣の発見につながるというのである。

そうは言うものの、ある財が貨幣となるプロセスを考慮すると、一定の「慣習」が根付くことが大切であるとメンガーは考える。財の交換に伴う取引の諸困難は、取引される財の種類が多くなればなるほど、したがってまた市場が拡大するほど増大するので、それだけ取引の不確実性は高まる。それゆえ、そうした不確実性を取り除き市場の拡大を図るためには、一定の「慣習」が確立される必要があるというのがその論拠である。すなわち、社会の成員の合意や法的強制力などに対する配慮なしに、「慣習」に従って各個人がみずからの経済的利益を追求するならば、「最も販売力の大きい財」が社会の全成員によって進んで受容されるようになるまで無視できない時間がかかるので、その社会に一定の「慣習」が根付くことが是非とも必要であるとメンガーは主張するのである。このように、メンガーが貨幣の生成において人々の「慣習」の果たす役割を重視していることにも注意を払う必要がある<sup>7)</sup>。

## 2 貨幣理論と進化理論

これまで検討してきたように、メンガーは商品の販売可能性という概念に着目し、スミスの「見えざる手」による人々の利己心に根差した自由競争を重視して、貨幣の生成をそうした競争による自然発生的な産物とみなしている。この点に関して、カリムサディは次のように指摘する。「販売可能性 (saleability)、市場性 (marketability) そして流動性 (liquidity) は互いに取り替えて用いられてきた概念である。……交換の発達は、共通の交換手段として働くある一定数の商品の選択を必要とする。変化する商取引環境に適合して生き残るような商品のみが流通するという意味で、選択の過程はダーウイン的な進化過程 (Darwinian evolutionary process) である」（Karimzadi [2013] p. 202, 傍点は引用者）。メンガーの貨幣起源論は、意図するか否かは別として、こうしたダーウイン的な進化理論と軌を一にしていることは否定し難いように思われる。

これまでメンガーの貨幣起源論の特色として、彼が人々の「利己心」、「慣習」、「進化過程」をとりわけ重視し、それらが「販売可能性」あるいは「販売可能度の差異」という彼独自のユニークな概念を構成し、その貨幣生成論の骨格をなしてきたことを見てきた。だが、もう一つ、メンガー理論の特色をなすものとして無視できないのは、貨幣の起源をはじめとしてさまざまな経済事象を主観主義 (subjectivism) 的な観点から把握しようとするアプローチであろう。こうした見方はかねてより多くの論者によって指摘されている。例えば、O'Driscoll [1986] は、「方法論的主観主義 (methodological subjectivism) はとくにメンガーあるいはオーストリア学派経済学の貢献である。……貨幣のミクロ経済学的な分析において、メンガーは〔貨幣という〕一般に受容される交換手段の出現を説明するために主観的な見方を採用する。その分析は、商人が直面する普遍的な不確実性に基づいている」(O'Driscoll [1986] pp. 602-603) と述べ、「メンガーの貨幣経済学——経済学一般に対しても同様——最も不朽の遺産は彼の主観主義であった。貨幣を集権的な決定の結果であるとする説明を拒絶して、メンガーは理論的な解を展開するために、個人主義的ないしはミクロ経済的な方法を用いた。このアプローチは彼をして貨幣の進化的理論を発展させた」(Ibid., p. 616) と述べていることに端的に窺われる<sup>8)</sup>。

以上、メンガーの貨幣起源論を中心に彼の貨幣理論をさまざまな観点から検討した。彼の理論は経済学説史の一断面を飾るにとどまらず、現代の経済理論にも非常に大きな影響を及ぼしている。例えば、Jones [1976], Kiyotaki and Wright [1989], Kiyotaki and Wright [1991], Kiyotaki and Wright [1993] および Smith et al [2011] などは、メンガー独特の貨幣理論や方法論に立脚して、

7) メンガーは次のような見方を提示する。「人々に〔交換の〕経済的利益を悟らせるには、この利益を得るために正しい方策をとった人々の経済的成功を見せるのが一番であるから、最も聡明で有能な経済主体が自分の経済的利益を図るために、長期間を通じて販売力が大きな商品を他の一切の商品と引き換えに受け取ることが貨幣の発生を何よりも促進したのは明瞭である。このように最も販売力のある商品が単に多数の経済主体によってだけでなく、経済主体のすべてによって彼らの商品と引き換えに受け取られるためには、慣習と実際 (custom and practice) が少なからず役立ったことは確実である」(Menger [1871] 邦訳 224 ページ、傍点は引用者)。こうした慣習を重視するメンガーの見解について、フランケルは次のように述べている。「メンガーにとって貨幣の起源は「意識されざる結果」、「社会の構成員のまさに一人一人の努力の計画されざる所産」であると考えてるのが最もしっくりしている。メンガーは慣習を貨幣の発展における最も決定的な要因とみなしていた。……メンガーにとっては、貨幣は一つの社会制度であった。それはまた、ある進化的なプロセスの結果であった」(Frankel [1977] 邦訳 56-57 ページ、傍点は引用者)。

もう一つ、蛇足を加えたいのは、スミス分業論における次のような見方である。「さまざまな職業に携わる人たちが、成熟の域に達したときに、一見他人と違うようにみえる天分の差異は、多くの場合、分業の原因だというよりもむしろその結果なのである。最も似通っていない人物間の違いは、たとえば学者と街のありふれた人足との間のように、生まれつきのものというよりもむしろ、習癖、習慣および教育によるように思われる。ついには学者のほうは虚栄心から、どんな類似点もまったく認めないようにまでなるのである」(Smith [1789] 邦訳 28-29 ページ、傍点は引用者)。この一文は、人間の成長における習慣や教育の重要性を示しているが、筆者にはスミスの体験に基づく感懐が潜んでいるように思われる。スミス分業論の最高の傑作ではなからうか。

8) O'Driscoll [1986] のほか、メンガーをはじめとするオーストリア学派が重視する主観主義的な見解については数多くの文献があるが、ここでは Sweezy [1934] (およびそこでの多くの引用文献)、Buchanan [1982]、Vaughn [1982] を挙げておきたい。また、オーストリア学派の特徴については、Kauder [1965] 第9章、Hicks and Weber (ed.) [1973]、Hutchison [1981] 第6章、第7章、Kirzner (ed.) [1982]、Grassl and Smith (ed.) [1986]、八木 [1988] が詳しい。

貨幣生成の背後にある個々人の合理的な行動メカニズムに新しい洞察を加えている。このうち Jones [1976] は、ある特定の商品が法令や集権的な決定なしに、個々人の非協調的な市場取引を通じて一般的交換手段（貨幣）となり得るかを、取引主体の主観的な確率分布で示される取引費用（例えば、「欲求の二重の一致」という物々交換の困難を克服し、市場で取引の相手を見出すための探索費用など）を最小化するという形で定式化し、なぜ個々人が直接交換よりも間接交換を選択するのかについて、メンガーによって提示された動学的な進化的プロセスを考察することによって明らかにしている。また Kiyotaki and Wright による一連の業績は、いわゆる探索モデル（search model）を用いてメンガーの「販売可能性」の概念に焦点を当て、最も大きな販売可能性をもつ特定の商品が貨幣として用いられるに至る交換のプロセスを分析したもので、その現代ミクロ経済学の最先端の理論は、いわばメンガー理論の再定式化を図ったものとして高く評価されている。さらに Smit et al [2011] は、社会を構成するある個人の一方的な行動の変化が、その社会の他の成員の協調的な行動を導くようなインセンティブを創造するというゲーム理論的な検討を通じて、ある特定の商品が何の集団的な強制も社会的な合意もなしに、一般的な交換手段（貨幣）として自発的に選択されるというメカニズムを明らかにする。「貨幣とは何か」と題するこの論文は、言語哲学者として著名なアメリカのサール（J.R. Searle）の理論に対する代替的解釈を示したもので、やはりメンガー理論の再定式化によって貨幣の起源を探っていると言えよう<sup>9)</sup>。数学嫌いのメンガーが、近年、各種の数理経済学的アプローチによって再び脚光を浴びているのはなんと皮肉なことである<sup>10)</sup>。

ところで、メンガー理論との関係で無視できないのは、J.R. ヒックスが『経済史の理論』で論じた「商人的経済」と貨幣生成との関連である。ヒックスは次のようにいう。「貨幣は有史の大部分において、鑄造貨幣（鑄貨）、すなわち、何らかの支配者の「肖像や銘」（image and superscription）がその表面に刻まれた金属片を意味していた。したがって貨幣は国家の創り出したものであるかのように思われてきた。また全時代を通じて国家体制と貨幣制度との間の関係が、きわめて緊密であったことは疑いのない事実である。それにもかかわらず、貨幣が国家の創出により始まったものでないことは明白である。貨幣は、鑄貨が現れる以前にも存在していた。貨幣はその起源から

---

9) Smit et al [2011] の貨幣の起源に関するゲーム理論的アプローチも、基本的にはメンガー理論の応用である。この論文は、「“貨幣”は、ある一定の方向に働くように動機づけられる」（Smit et al [2011] p. 11）のであり、「“貨幣”は、グループの人々がある一定の事物を“貨幣”としてみなすと集団的に決定するという事実によって構成される」（*Ibid.*）という集合的志向性（collective intentionality）を重視するサールの見解とは代替的な考え方を提示する。その根幹にあるのは、ある経済主体がある財を、たとえ彼自身直接には必要としていなくとも、彼の売りに出す財を求めている人々から入手できるような財と交換することによって、彼が真に必要とする財を最終的に獲得することができるという考え方である。こうして迂回的なプロセスを通じて交換を成立させようという見解は、まさにメンガーのそれと同じである。Smit et al [2011] では、ある島に住む人がタバコを貨幣として導入しようとする一方的に試み、その島の他の住民を協調して行動させるように動機づけることによって、最終的にその島に“タバコ本位制”（cigarette standard）を樹立するケースが示されている。

10) 上に紹介した最近の論文はすべて、ゲーム理論やサーチ・モデルといった数理経済学的分析手法を用いてメンガー理論の再定式化を行っている。ところがメンガー自身は、経済理論の数式による定式化には一貫して疑問をもっていたとされる。この数学的手法に対するメンガーの見解については、Kauder [1965] 邦訳 98 ページ（本稿の注 15）、Hayek [1973] p. 10 および Menger, Karl [1973] を参照されたい。なお、Menger, Karl [1973] の著者はメンガー自身ではなく、彼のジュニアである。

いえば、商人的経済（Merchant Economy）の創出物の一つであった。それは商人的経済が創出した最初のものであるにもかかわらず、のちに諸政府（まったく非商業的な政府さえも）がそれを継承するようになったのである」（Hicks [1969] 邦訳 110 ページ。この一文は、商人的経済あるいは商業活動と貨幣創出との緊密な関係を簡潔に示している<sup>11)</sup>。

上に紹介したように、現代の経済学におけるメンガーの復位は顕著であり、彼のユニークで精緻な貨幣起源論は他の追随を許さないと決して過言ではない。貨幣が生成するに至るまでのストーリーは完璧に近いと言わざるを得ない。ただし、メンガーの分析には一つの重要な問題が伏在しているように思われる。すでに検討したように、マルクスが描写する交換の初期段階における物々交換システムが、当時の現実の社会・共同体とどれほど整合的であるのか、あるいは歴史的な検証に耐えられるのかという問題は、なお十分検討する余地がある。同じことはメンガーにも妥当する。

メンガーは、『国民経済学原理』第8章の「各国民および各時代に特有な貨幣について」と題する第2節において、時代や国に応じてさまざまな財が貨幣として用いられてきた事実をかなり詳細に描写している。そのことと、彼の「販売可能度」ないしは「販売可能度の差異」というキー概念を軸に展開する迂回的な、あるいは試行錯誤的な交換プロセスとがどのように結びつくのかは判然としない。そんなことはあり得ないだろうが、非常にうがった見方、意地悪な見方をすれば、貨幣生成に至るまでのメンガーの推論は、かつて敏腕の新聞記者としてならした彼の巧みなプロットであるという解釈もありうるのではなかろうか<sup>12)</sup>。彼の理論体系が、過去の実事や経験のうえに築かれているのではなくて、一種の架空のフィクションと受け取られかねない。やはりマルクスの場合と同様、歴史的検証に耐えられるのかという疑問をぬぐえないのである。この点は、今後の検討課題として残されているように思われる<sup>13)</sup>。

11) ヒックスはこの引用文について次のような注を付している。「このことは、純理論的には、オーストリアの経済学者カール・メンガーによって見出されていた。カール・メンガーの英語の論文（Menger [1892]）は、貨幣論の一つの古典というに値するものである。これは、すでに『国民経済学原理』においてその輪郭が明らかにされていたメンガーの主張、すなわち、財はその直接的効用においてばかりでなく、その「市場性」においても異なるのであり、貨幣は完全な市場をもつ極端なケースであるとの主張を明確に述べている。これはきわめて優れた原理であり、現代貨幣理論の出発点をなすものである。メンガーが理論的に見出したことを、考古学者たちは豊富な資料によって裏付けてきている」（Hicks [1969] 邦訳 135 ページ）。

12) カール・メンガーが、学生時代からすでに活発なジャーナリズム活動を行っていたことは比較的よく知られている。ただ、そのジャーナリズム活動の具体的な内容については不思議なことにほとんど知られていない。この点はハイエクが「しかしながら、われわれはメンガーの青年期および教育についてほとんど知らない。私は、それにもっと光を投げる仕事がおーストリア人によってほとんどなされてこなかったことを残念に思わざるを得ない」（Hayek [1973] p. 4）と慨嘆し、八木紀一郎が『「原理」準備期・執筆期のメンガーの生活についての私たちの知識の貧弱さ』（八木 [1990] 99 ページ）を指摘し、「たとえば、学界に入る前のメンガーがジャーナリストの経歴をもっていたことは比較的よく知られているが、いったいどのようなジャーナリズム活動であったのかという具体的な情報は欠けていたのである」（同）というとおりである。

## VI むすび

物々交換の困難を克服することが、貨幣生成の契機であるとの考え方についてロー、マルクス、メンガーの見解を中心に検討してきた。しかしながら、はたして物々交換が現実に存在したのか否かという根本的な問題、すなわち、その歴史的・実証的証拠の存在それ自体については必ずしも問題がないわけではない。「その圧倒的な優勢と評判にもかかわらず、われわれは他と区別してうまく定義された物々交換システムないし原始共産的経済システムについての何の証拠も持っていない。そうした社会の特徴は経済学者や人類学者によって報告されてきたが、これらの特徴は非常に曖昧で一般的であり、決定的であるとはみなされ得ない」（Karimzadi [2013] p. 219）という見方も無視できない。「物々交換の時代と定義しうる、そしてはっきりとその境界を示しうる歴史的な時期は存在しない。それは実在しない憶測的なモデルにほかならない。物々交換についての経済学者の記述に適合する経済システムは、何ら歴史的な先行をもたない。……貨幣の起源についての伝統的な理論は、この「物々交換という」思考過程に囚われている。皮肉なことには、想定のコアは尊敬されるけれども、同時にどの経済学者もその理論がまったく不満足であることを見出している。一般に承認された知恵では、いつ、どのようにして、そしてなぜ貨幣が存在するようになったかをわれわれに語ることはできない」（*Ibid.*, p. 243, 傍点は引用者）という厳しい批判も存在する<sup>14)</sup>。

- 13) 吉沢英成はメンガーの貨幣論について、「方法的な自覚にも満ち、きわめて精緻に展開されたもので、19世紀的な貨幣論の極致とよぶに値する」（吉沢 [1981] 84 ページ）と賞讃する。ただし吉沢は、メンガーの重視する「販売可能度」という概念について、「『販売可能度』といった概念は一般的な交換手段のもとで存在する概念で、その概念自身、貨幣を含意しているのである。財貨それぞれに『市場性』の度を前提する、すなわち『販売可能度』という概念を前提するということは、形成されるべき貨幣を前提するというにも等しい」（同、88 ページ）という。そして交換取引の枠内では貨幣の起源は説明できないとして、「形而上的な次元、すなわちシンボル体系において貨幣を位置づける」（同 98 ページ）という観点からの考察が必要であると主張する。彼は貨幣と言語のアナロジーを重視する議論を重視し、文化人類学的な観点から貨幣の起源について周到な考察を加えている。しかし、メンガーの独創的な「販売可能度」という概念について、「貨幣を前提するということにも等しい」と断じることは、まったく的はずれであり、吉沢のメンガー批判は、肝心のメンガーの議論の核心をほとんど咀嚼していないと言わざるをえない。また、現代に至るまでの貨幣の歴史を考えるうえで、「シンボル体系において貨幣を位置づける」ような分析が果たして有効なのか否か、十分な検討が必要であるように思われる。この点については、近い将来、いわゆる原始貨幣について議論を展開する際に言及することにしたい。
- 14) 例えば、人類学者のダルトンとデイビスはそれぞれ次のように述べている。「貨幣のない市場の交換という厳密な意味での物々交換は、われわれが強力な情報を持っている過去あるいは現在の経済システムにおいて、決して量的に重要でなかったか、あるいは支配的な取引モデルではなかった」（Dalton [1982] p. 185）。「物々交換は、過去においても現代の経済制度においても非常に広範に生じるが、しかしながら、それは物々交換を行う者によって、常にマイナーな、散発的な、急場しのぎに用いられた取引に過ぎず、彼らは別のより重要な取引方法を知っているのである」（*Ibid.*, p. 185, p. 188）。「物々交換についてのほとんどの説明は、貨幣に関する現代の教科書に典型的に見られる基本的な事例を提供するためになされてきた。その場合、これらの説明は、物々交換の不利益をあまりにも強調するのみならず、この誤解を招くほど狭隘かつ間違っただ見解に基づいて貨幣の生成を基礎付け、物々交換の明白な欠点よりもずっと重要な他の要因を排除しがちであったのはほとんど不思議ではない」（Davies [1994] pp. 9-10）。「彼ら〔原始貨幣に関する専門家〕の共通の確信——全世界の、また古代世界についての考古学、文学・言語学からの原始貨幣の現実のタイプについての圧倒的な実際の証拠に支えられた信念——は、物々交換は貨幣の起源や最も初期の貨幣の発展における主要な要因ではなかった」（*Ibid.*, p. 23）。

貨幣生成の理論は、プラトンやアリストテレスに始まり現代に至るまで、さまざまな原因、多様な観点から、無数とも言える文献において論じられてきた。そうしたなかで、物々交換の困難を回避するために、一般受容性をもつある特定の商品が交換手段として選択され、貨幣の位置を占めるようになったとする考え方が標準的で支配的である。こうした物々交換に起因する貨幣起源論のなかでも、ジョン・ロー、カール・マルクス、カール・メンガーという3人の貨幣理論が卓越した内容をもっていることは確かであるように思われる。

信用創造理論のパイオニアであり、いわゆる「ロー・システム」を導入したスコットランド人は、アリストテレスやプーフェンドルフに代表される「社会的合意説」あるいは「社会的契約説」という人為的な貨幣起源論に異を唱え、貨幣が物々交換の困難を克服するために自然発生的に生じたとの考え方をおそらく最初に提起した人物である。それと同時に、貨幣は金・銀のように素材自体が価値をもつ商品、すなわち金属貨幣（ないし商品貨幣）である必要はなく、交換手段として機能するものは何であれ貨幣であるという、当時としてはきわめて独創的な理論を打ち出し、貨幣経済学の新しい展望と沃野を切り開いたのである。

マルクスもローと同様に、貨幣の自然発生説を提唱する。マルクスによれば、国家が合意によって生じないのと同様、貨幣も合意によっては発生しないのであり、貨幣は物々交換の中から自然発生的に生じたという意味で、「貨幣は交換の所産である」(Marx [1857-1858] 邦訳 86 ページ) という。そして貨幣生成のはじめにどのような商品が使われるかは、その社会・共同体にとって偶然的な要素に左右されるとして、家畜や奴隷なども一例として挙げている。ただし、商品交換が局地的制約を超え、次第に拡大するにつれて、貨幣形態は一般的な等価物という社会的な機能に適している商品、すなわち貴金属（とくに金）へと収斂していくと主張する。つまり、貨幣の社会的機能と貨幣の素材価値を重視するのである。しかし、現代に至る貨幣の歴史を振り返れば明白であるように、貨幣名目主義を批判し、貨幣商品説（金属主義）を信奉しているところにマルクス貨幣論の限界があることは否定し難い。仮にそうであったとしても、商品の売買というわれわれが日々繰り返している平凡な営為のなかに、商品の売り手と買い手の絶えざる対立があり、経済活動の深淵が潜んでいるというマルクスのメッセージを見逃すことはできない。古典派や新古典派、あるいはケインズ経済学といった主流派経済学には見られないマルクス独自の価値形態論を確立したことは、やはり偉大な業績であると言わねばならない。

限界効用理論の創始者の一人であり、オーストリア学派の創設者であり、新古典派経済学の創始者と目されるメンガーも、貨幣が国家の権力や法制の産物ではなく、間接交換の発達につれて自然発生的に生じたと主張する。この点では、ローやマルクスとまったく同様である。しかしメンガーは、彼らとまったく異なった視点から、「商品の販売可能性」あるいは「商品の販売可能度の差異」というキー概念を用いて、貨幣の生成についての独創的な議論を展開する。彼は商品の使用価値についての主観主義的アプローチに基づいて、各経済主体がみずからの利益を合理的に追求するという個人主義的な方法に立脚する。商品交換が発達するにつれて、共通の交換手段として機能する商品（貨幣）の選択を必要とするが、その選択の過程はダーウィンのような進化過程として特徴づけられる。メンガーの貨幣起源論は、主観主義と進化理論を両軸として、その社会を構成する各経済主体の利己心こそが貨幣の生成を促すことを明らかにする<sup>15)</sup>。

ただし、筆者は、マルクスの価値形態論や彼が描写する交換の初期段階における物々交換システムが過去に実在した社会の現実とどれほど整合的であるのか、あるいは歴史的な検証に耐えられる

のかという疑問をめぐりえない。同じ疑問はメンガーにも妥当する。メンガーは時代や国に応じてさまざまな財が貨幣として用いられてきたことは十分に認識しているけれども、そうした認識と「販売可能性の差異」による普遍的な迂回的交換プロセスの間にどのような密接な関係があるのかは何も示していない。この点で、マルクスもメンガーも同じ問題を抱えているように思われる。

その一方で、ジョン・ローとジョン・ロックという“2人のジョン”の間に大きな考え方の相違あるいは対立する正反対の見解が存在するように、カール・マルクスとカール・メンガーの“2人のカール”の間にも大きな対立する見解の相違が存在する<sup>16)</sup>。

本稿は、ジョン・ロー、カール・マルクス、カール・メンガーの貨幣起源論を中心に考察した。彼らの貨幣起源論は現在でも依然として有力な見解であることは否定し得ない。ただし、貨幣生成の論拠については、本稿では論じなかったさまざまな考え方が存在する。例えば、アリストテレスに代表される社会契約説ないし合意説がその一つであり、またクナップに代表される貨幣固定説（法制説）についても、それを支持する見解は必ずしも少なくない。あるいは貨幣起源説として

15) これまで強調したように、メンガーの貨幣起源論においては、経済活動に従事する人々の利己心が大きな役割を果たしていることは確かであり、彼の主張に対しては、グスタフ・フォン・シュモラー（Gustav von Schmoller）に代表される後期歴史学派の人々によって「利己心のドグマ（the dogma of self-interest）」（Menger [1883] 邦訳 76 ページ）と非難されることがある。この非難に対してメンガーは、「経済人の、財貨欲求の充足をめざす努力のなかでの人間的利己の発現を精密的なやりかたで追求し、われわれに理解させる理論こそ精密経済学（*the exact theory of political economy*）である。したがって、精密経済学は、社会現象または人間現象、さらには通常『国民経済現象』とよばれる社会現象さえも、一般的にかつ全体的にわれわれに理解させる課題をもつものではなく、ただ人間生活の特別な、もちろんもっとも重要な、経済的側面の理解だけをわれわれに与えるという課題をもつ理論なのである」（Menger [1883] 邦訳 82 ページ、傍点は原文ではイタリック）と反論し、歴史学派の誤謬や無知に対して反撃を加えている。

上の引用からも明らかなように、『経済学の方法』（1883年）は、ドイツ歴史学派、とくに後期歴史学派がもっぱら歴史的な研究に特化し、理論的研究を過小評価、あるいは無視して現実の経済現象を踏まえた理論的研究を疎かにしてきたと批判する。メンガーは同書「序言」において、次のように述べている。「一つの学問の方法論の確立とその学問の十分な完成との間には、その研究の天才だけが克服できる無限の距離が横たわっている。研究者の実証的な才能はしばしば完成した方法論なしによく一つの学問を創造し、または画期的なやり方で変革したが、方法論だけでこのような才能をもたないでは、このようなことはあったためしがない。方法論は、一つの学問の領域では第2次的な仕事に対しては比類なく重要なものだが、天才だけに解決を待つような偉大な課題に対しては重要性が乏しいのである」（Menger [1883], 邦訳 7-8 ページ）。しかし、歴史学派が隆盛をきわめる現状へのメンガーの痛憤は、彼をして経済学方法論の確立の必要性を感じさせたに相違ない。その意味で、この書物は当時の経済学の状況に变革を迫り、明確な研究の指針を与えたものとして、彼の名著『国民経済学原理』に劣らず、重要な貢献をしたと思われる。

16) 岩井克人は、労働価値論に立脚するマルクスと、新古典派経済学の創始者とされるメンガーの間には大きな見解の相違があることは当然であるとしても、結果的には二人の結論がほぼ同じであると指摘している。すなわちメンガーは、「最も販売可能性の高い商品」を、それ自体を使用するためではなく、「再度交換することを目的として受け入れる」（Menger [1892] p. 249）ようになると主張しているが、これは次のようなマルクスの見解と同一であるという。「マルクスにおける全体的な価値形態Bから、一般的な価値形態Cへの移行過程を方法的個人主義の立場から理論化したものとみなすことができる。このように、労働価値論を出発点としたマルクスと、新古典派経済学を創始したメンガーという一見まったく対立する立場をとっていた二人が、同じ時期に独立してほぼ同型の貨幣創世記を書いたという事実には、思想史的に興味深いものがある」（岩井 [1993] 101-102 ページ、注6）。

「原始貨幣」をどのように位置づけるかも無視できない重要な課題である。これらについては、近い将来改めて検討する予定である。

## 参考文献

以下に引用した文献については、漢字や平仮名などを含め、必ずしも翻訳には従っていない場合がある。

- Buchana, James M. [1982], "The Domain of Subjective Economics : Between Predictive Science and Moral Philosophy," in Israel M. Kirzner (ed.), *Method, Process, and Austrian Economics. : Essays in Honor of Ludwig von Mises*, Lexington, Massachusetts, Lexington
- Campagnolo, Gilles. [2002], "The Carl Menger Library in Japan : a study of the sources of an economic thought," (山崎耕一訳「メンガー文庫：ある経済思想の原資料」), 『社会科学センター年報』(一橋大学).
- Dalton, George. [1982], "Barter" *Journal of Economic Issues*, vol. 16, no.1, pp. 181-190.
- Davies, Glyn, [1994], *A History of Money, : From Ancient Times to the Present Day*, Cardiff, University of Wales Press.
- Frankel, S.H. [1977], *Money : Two Philosophies, The Conflict of Trust and Authority*, Oxford, Basil Blackwell.
- Grassi, W. and B. Smith (ed.) [1986], *Austrian economics : Historical and Philosophical Background*, London, Croom Helm. Ltd
- Harris, Joseph [1757-58], *An essay upon money an coins*, part1, East Ardsley, S.R. Publishers Limited. (アダム・スミスの会監修, 初期イギリス経済学古典選集 13, 小林昇訳『貨幣・鑄貨論』東京大学出版会, 1975年).
- Hayek, F.A. [1973], "The Place of Menger's *Grundsätze* in the History Economic Thought," (in Hicks, J.R. and W. Weber (ed.). [1973], *Carl Menger and the Austrian School of Economics*, Oxford, At the Clarendon Press, pp. 1-14).
- Hicks, J.R. [1967], *Critical Essays in Monetary Theory*, Oxford: Clarendon Press (江沢太一・鬼木甫『貨幣理論』東洋経済新報社, 1972年)
- Hicks, J.R. [1969], *A Theory of Economic History*, Oxford: Clarendon Press (新保博・渡辺文雄『経済史の理論』講談社学術文庫, 1995年).
- Hicks, J.R. and W. Weber (ed.) [1973], *Carl Menger and the Austrian School of Economics*, Oxford, At the Clarendon Press.
- Hutchison, T.W. [1981], *The Politics and Philosophy of Economics, : Marxians, Keynesians and Austrians*, Oxford, Basil Blackwell.
- Jevons, W. Stanley [1875], *Money and the Mechanism of Exchange*, London : Kegal Paul, Trench, Trubner & Co.
- Jones, R.A. [1976], "The Origin and Development of Media of Exchange," *Journal of Political Economy*, vol. 84, no.4, pp. 757-775.
- Karimzaki, Shahzavar [2013], *Money and its Origins*, London and New York, Routledge.
- Kauder, Emile [1965], *A History of Marginal Utility Theory*, Princeton, Princeton University Press (斧田好男訳『限界効用理論の歴史』嵯峨野書院, 1979年).
- Kirzner, I.M. (ed.) [1982], *Method, Process, and Austrian Economics : Essays in Honor of Ludwig von Mises*, Lexington, Massachusetts, Lexington D.C. Heath and Company. Books.
- Kiyotaki, Nobuhiro, and Randall Wright [1989], On money as a medium of exchange, *Journal of Political Economy*, Vol. 97, No. 4, pp. 927-954.
- Kiyotaki, Nobuhiro, and Randall Wright [1991], A contribution to the pure theory of money, *Journal of Economic Theory*, Vol. 53, No. 2, pp. 215-235.
- Kiyotaki, Nobuhiro, and Randall Wright [1993], A search theoretic approach to the pure theory of money, *American Economic Review*, Vol. 83, No. 1, pp. 63-77.
- Knapp, G.F. [1922], *Staatliche Theorie des Geldes*, 3 Aufl. (宮田喜代蔵訳『貨幣国定学説』岩波書店, 1922年).

- Knapp, G.F. [1924], *The State Theory of Money*, abridged and trans. by H.M. Lucas and J. Bonar, London, Macmillan.
- Lapavitsas, Costas [2005], "The Universal Equivalent as Monopolist of the Ability to Buy," in Moseley, F. (ed.), *Marx 'Theory of Money ; Modern Appraisals*, Palgrave.
- Law, John. [1994], John Law's 'Essay on a Land Bank', edited by A.E. Murphy, Dublin, Aeron Publishing.
- Law, John. [1705], *Money and Trade Considered with a Proposal for Supplying the Nations with Money*, Reprints of Economic Classics, Augustus M. Kelly · Publishers, New York 1966.
- Locke, John [1691] *Some Considerations of the Consequences of the Lowering of Interest, and Raising the Value of Money*, London (田中正司・竹本洋訳『利子・貨幣論』：『利子の引下げおよび貨幣の価値の引上げの諸結果に関する若干の考察』東京大学出版会, 1978年).
- Locke, John [1695] *Further Considerations Concerning Raising the Value of Money*, London (田中正司・竹本洋訳『利子・貨幣論』：『貨幣の価値の引上げに関するする再考察』東京大学出版会, 1978年).
- Marx, Karl. [1857-1858], *Grundrisse, der Kritik der Politischen Ökonomi* (Rohentwurf), Anhang 1850-1859, Dietz Verlag, Berlin, 1953 (高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』(草案), 第1分冊, 大月書店, 1959年).
- Marx, Karl [1859], *Zur Kritik der Politischen Ökonomie*, Erstes Heft, Volksausgabe, besorgt von Marx-Engels-Lenin-Institut, Moskau (武田隆夫他訳『経済学批判』岩波書店, 1956年)
- Marx, Karl [1890], *Das Capital*, Erster Band, Diez Verlag (中山元訳『資本論：経済学批判』第1巻1, 日経BP社, 2011).
- Marx, Karl. [1952], *Das Capital*, Erster Band, English translation by Samuel Moore and Edward Aveling of the 3th German edition [1883] and additional translation by Marie Sachey and Herbert Lamm from the 4th edition., Capital, vol. 1 (The University of Chicago : Encyclopaedia Britannica, 1952)
- Marx, K Karl [1970], *A Contribution to the Critique of Political Economy*, New York, International Publishers.
- Menger, Carl [1871], *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre Erster, allgemeiner Theil*, Verlag Wirtschaft und Finanzen, Düsseldorf (安井琢磨・八木紀一郎訳『国民経済学原理』日本経済評論社, 1999年).
- Menger, Carl [1883], *Problems of Economics and Sociology (Untersuchungen Über die Methode der Socialwissenschaften und der politischen Oekonomie insbesondere*, Leipzig), translated by Francis J. Nock, Urbana, University of Illinois Press (福井孝治・吉田昇三訳, 吉田昇三改訳『経済学の方法』日本経済評論社, 1986年).
- Menger, Karl. [1892], "On the Origin of Money," *The Economic Journal*, Vol. 2, No. 6 (June), pp. 239-255.
- Menger, Carl. [1923], *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre* 2. Aufl., aus dem Nachlaß hrsg. von Karl Menger, Wien und Leipzig (八木紀一郎・中村友太郎・中島芳郎訳『一般理論経済学：遺稿による「経済学」原理第2版』みすず書房, 1982-1984年)
- Menger, Karl. [1973], "Austrian Marginalism and Mathematical Economics," (in *Carl Menger and the Austrian School of Economics* edited by J.R. Hicks and W. Weber, Oxford, Clarendon Press)
- Menger, Carl [1976], *Principles of Economics*, first, General Part, translated and edited by James Dingwall and Bert F. Hoselitze, the Institute for Human Studies (reprinted by the Ludwig von Mises Institute, 2007).
- Mises, L.V. [1953], *The Theory of Money and Credit*, translated by H.E. Batson, Yale University Press.
- Montesquieu [1748, 1951] (野田良之他訳『モンテスキュー 法の精神』(中巻)岩波書店, 1989年)
- Murphy, A.E. [2009], *John Law : Economic Theorist and Policy Maker*, Oxford, Oxford University Press.
- Nussbaumer, Adolf [1973], "On the Compatibility of Subjective and Objective Theories of Economic Value" (in J.R. Hicks and W. Weber (ed.) *Carl Menger and the Austrian School of Economics*, Oxford, Oxford University Press.)
- O'Driscoll, G.P. [1986], "Money : Menger'evolutionary theory." *History of Political Economy*, Vol. 18, No. 4 (Winter), pp. 601-616.
- Pigou, A.C. [1950], *The Veil of Money*, London, Macmillan and Co. Ltd (first edition 1949).
- Schumpeter, Joseph A. [1954], *History of Economic Analysis*, New York, Oxford University Press (東畑精一・福岡

- 正夫訳『経済分析の歴史』（上）（中）（下）2006年）。
- Shakespeare, William [1623] 大場健治訳, 研究社, 2010年。
- Smit, J.P., Filip Buekens, and Stan du Plessis [2011], What is money? An alternative to Searle's institutional facts, *Economics and Philosophy*, vol. 27, No. 1, pp. 1-22.
- Smith, Adam. [1789], *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. in three volumes, the fifth edition, London, A. Strahan and T. Cadell (大河内一男監訳『国富論 I』中央公論社)。
- Sweezy, Alan.R. [1934], "The Interpretation of Subjective value Theory in the Writings of the Austrian Economists." *The Review of Economic Studies*, Vol. 1, No. 3.
- Vanderlint, Jacob [1734], *Money answers all Things*, S.R. Publishers Ltd. East Ardsley, Wakefield, Yorkshire (浜林正夫・四元忠博訳『貨幣万能』東京大学出版会, 1977年)。
- Vaughn, Karen I. [1982], "The Domain of Subjective Economics : Between Predictive Science and Moral Philosophy," in Israel M. Kirzner (ed.), *Method, Process, and Austrian Economics. : Essays in Honor of Ludwig von Mises*, Lexington, Massachusetts, Lexington
- Walker, F.A. [1878] *Money*, New York, Henry Holt & Company (Reprinted by Augustus M. Kelley · Publishers, New York, 1968)
- Wieser, F. [1904], "Der Geldwert und seine geschichtlichen Veränderungen", Antritts Voleswirtschaft, gehalten am 26. Okt, an der Wiener Universität, Zeitschrift für Volkswirtschaft, Sozialpolitik und Verwaltung, VIII. Bd., Gesa Gesammelte Abhandlungen, SS. 164-192 im Hanörterbuch der Staatswissenschaften, 4.Aufl, IV, Bd. Jena, SS., 681-717. (安田充訳『貨幣論集』第2章「貨幣の価値とその歴史的変動」, 有斐閣, 1941年)。
- 伊藤誠・C. ラバヴィツァス [2002]『貨幣・金融の政治経済学』岩波書店。
- 石倉雅男 [2012]『貨幣経済と資本蓄積の理論』大月書店。
- 岩井克人 [1993]『貨幣論』筑摩書房。
- 岡田裕之 [1998]『貨幣の形成と進化：モノからシンボルへ』法政大学出版局。
- 高田保馬 [1931]『経済学新講第3巻（貨幣の理論）』岩波書店。
- 降旗節雄 [1976]『マルクス経済学の理論構造』筑摩書房。
- 古川顕 [2012]『R.G. ホートレーの経済学』ナカニシヤ出版。
- 古川顕 [2014]『テキストブック 現代の金融』（第3版）東洋経済新報社。
- 古川顕 [2015a]「ジョン・ローの貨幣理論」『甲南経済学論集』第55巻第3・4号, 211-271 ページ。
- 古川顕 [2015b]「ジョン・ローのマクロ経済理論」『経済論叢』第189巻第2号, 1-18 ページ。
- 八木紀一郎 [1988]「1871年以降のカール・メンガー」（『オーストリア経済思想史研究』）。
- 八木紀一郎 [1990]「メンガー『経済学原理』の成立」, 『経済論叢』第146巻第1号。
- 山口重克 [1985]『経済原論講義』東京大学出版会。
- 吉沢英成 [1981]『貨幣と象徴』日本経済新聞社。